

みなさん こんにちは



NPO法人
えぬぴーおーほうじん
全国万引犯罪防止機構
ぜんこくまんびきはんざいぼうしきこう



(まんぼうきこう)

平成24年度 NPO法人全国万引犯罪防止機構 制作作品

1

こんにちは、みなさん

今から、あなたや友達が体験するかも知れない身の回りの犯罪対策のお話をします。

できれば、この話を忘れないで

いつか、あなたが人の親になったときに、お子さん達に、はなしてあげてください。

その時、今と違った気づきに出会えると思います。

本が泣いている

2

「本が泣いている」

第一章 教室の異変

いへん

3

第一章 教室の異変



「万引きはれっきとした窃盗罪なのよ。どろぼう！」

叫んだのはアケミだった。

教室の隅では物々交換が行なわれていた。

以前はカードが中心だったが、最近ではマンガ本やゲームソフトがやり取りされている。

この頃では同じタイトルの新刊マンガ本を何冊も持ってくるクラスメートもいた。

「フン、証拠でもあるのかよ。万引きはな、盗んでいる時でないと逮捕されないんだよね。変なこと言ったら、お前を訴えてやるからな」とタケハルがアケミをにらんだ。

ミチオは教室の異変に気づきはじめていた。



夏草の生い茂る小道を抜けると正門だ。「おはよう」と先に挨拶するのは校長先生だ。子供たちは「おはようございます」の声をかけてくれるのだが、高学年の一部に視線を外し聞こえない振りでゲタ箱へ向かって行く子供たちがいた。校長先生はもう一度「おはよう」を言ってみるのだが返事がない。まるで影に向かって話しかけているような気がした。

「校長先生、ちょっと変わったギフチョウを見つけたよ」

ふり返るとミチオがいた。

「ちょっと変わったギフチョ？ どこに」

「お堂下の湧き水のところ」

「そうか、今度詳しく教えてほしいな」

ミチオに昆虫の観察を教えたのは、校長先生だった。

校長室にはたくさんの蝶の写真がパネルにし飾ってある。ミチオが掃除当番のときにそれを眺めていると校長先生が名前や生息地などを説明してくれた。



6

教室の隅では、いけない物がコソコソ取引されていた。

アケミは自分の席からその様子を見ているとタケハルがやってきて

「じろじろ見るなよ、お前ってさ、気持ち悪いんだよ。なあ、シュンタ、アケミって気持ち悪いよな」

シュンタは小声で「うん、気持ち悪い」と言った。

タケハルは続けて「みんなそう思っているんだよ。ミチオだってそう思っているだろう」

ミチオは黙ったまま図鑑をじっと見つめていた。



その日の放課後、アケミはしょうこうぐちのゲタ箱の前でうろうろしていた。
ミチオは「何か探しているの?」とたずねた。
「私の・・・白いシューズが見あたらないの・・・」
「誰か間違えて履いていったのかな」
「中に名前も書いてあったのに」
ミチオは自分のゲタ箱の奥に白いシューズがあるのに気づく。
「もしかして、これ」
「そう」
「いたずらだね」
「嫌がらせよ」



8

二人は校庭を歩きながら、タケハルたちのことを話しあった。

ミチオは、「学校にマンガ本とかゲームソフトを持ってきたりいけないことぐらい誰だって知っているけど、怖くて言えないんだ。面倒なことに巻き込まれるのも嫌だしね」

「そうだけど」

「なんで君はそんなにムキになるの」

「だって商品を万引きされて、お店の人たちは本当に困っているのよ」

「ふーん、そうなんだ」

「ミチオ君にとっては他人事だよ。みんなにとっても他人事・・・」

「・・・」

「先に帰るね」

アケミの後ろ姿を見送りながら、ミチオは「そんなこと言われても・・・」と独り言をいった。



9

数日後、ミチオは近所の書店いた。いつも読む科学雑誌を探していた。マンガコーナーに目をやるとシュンタがマンガ本を自分のバックに入れているところだった。その向こうでタケハルたちが従業員に気づかれなよう見張り番をしていた。シュンタはバックに何冊も本を入れた。どれも人気アニメ番組の原作となっているマンガ本だった。



写真は日経ビデオ「お店の万引対策」より

10

その時、シュンタと一瞬目が合った。シュンタたちは十冊ほど万引きすると早足に去っていった。

アケミが話していたのはこの事だったのだろう。まさかクラスメートが集団で万引きをしているなんて・・・



11

翌日の下校途中に、ミチオはシュンタから詳しい話を聞いた。シュンタは三年生の終わりに転校してきた。最初の頃は、クラスのどのグループにも入れてもらえず、イジメの対象になったそう。カバンの中にカビの生えた食パンを入れられたり、ノートにいたずら書きをされたらしい。

「今はタケハルたちのグループに入れてもらって良かったじゃないか」と言いながらミチオはシュンタの横顔に目をやった。

「だけど、万引きは嫌なんだ」とシュンタはミチオの視線をそらした。「でも、彼らといるといろいろなことを教えてもらえるし、結構楽しいんだ」

ミチオは再びシュンタを見て「タケハルに、いいように使われている気もするけど」と投げかけた。

シュンタは「そうかも知れない。それでもいいんだ」と言い、また視線をそらした。そして、カバンの中からカッターナイフを出した。「ミチオくん、もし万引きのこと誰かに話したら許さないから」とミチオに念を押した。

カッターナイフを戻すカチカチ鳴る音がミチオの耳にこだました。



12

ミチオの家の朝食は六時半からだ。お父さんは町内の回覧板に目を通しながら「最近、子供たちの万引きが増えて商店街の人たちが困っているそうだ。警察や自治会では防犯パトロールを強化するって」と話すと、

お母さんが「中古屋さんやリサイクルの店で引き取ってくれるところもあるらしいのね。だから一回で何万円も盗む人もいるそうよ」

「万引って意外に重い罪なのに知らない人が多いんだ」

「イヤですよ。お父さん、こっそり万引きしていないでしょうね」

「そんなことしたら、会社をクビになるよ。それよりもお母さん達の万引きもけっこうあるんだってよ」

「うふふふ。母さんも万引きしているかもよ」

ミチオとお父さんは、顔を見合わせた。

お母さんは「冗談よ」と笑った。

お父さんはほっとして「ミチオ、何かほしいものがあったら相談するんだぞ」

「うん」と言いながら、ミチオはシュンタやタケハルたちのことを思っていた。

第二章

目をそらさないで

13

第二章 目をそらさないで



14

夏が近づいてきたある日、担任の先生と校長先生から、とんでもない話を聞いた。

「きのう、緑野商店街にあるゲームソフト屋さんで、ウチのクラスの生徒が集団万引きをしました。逃げる途中、従業員さんにナイフで斬りつけ、大怪我をさせました。校長先生も警察に行かれ大変お叱りを受けたんです。いいですか、これは本校始まって以来的の不祥事です。先生はどうしたらいいのかわかりません」先生は下を向いたまま動かなくなった。

それまで子供たち見ていた校長先生はゆっくり話しはじめた。「ナイフで切られたのは女性の店員さんです。切られた場所は額。十二針も縫ったそうです」と校長先生は額を人差し指で水平になぞり「でも、女性店員さんはね、『自分を傷つけた子どもを責めないでください』とおっしゃいました。『その子を見捨てて他の子供たちは逃げて行きました。自分だけが取り残されたと思ったとたん、ナイフを振り回し始めました。その子も被害者なのでは・・・』と話されていました」

校長先生は深呼吸してから、再び話しを続けた。「わたしはなぜこのようなことが起きたのかを考えてみました。一晩考えて事件を起こした生徒だけの問題だけではないと気づきました。この事件の奥にあるものをクラス全員が見つめなければ解決はできません。いや、先生方を含め学校の全員で考えなければいけないことだと思います。この地域に住む一員として何ができるかを、勇気をふるって提案してください。そうしないと学校がダメになり、この街がダメになり、あなた自身がダメになる」校長は赤くはれあがった目を見開き、皆を見つめた。誰もが沈黙した。

万^{まん} 引^{びき}

15

しばらくしてアケミが言った。「万引きのことはクラス全員が知っていました。盗んだマンガ本だとわかっているのに安いからと買った人もいるはずです」

ミチオは「すいません。ボクも知っていました。でも、どうしたらいいのか分かりませんでした。万引きのことを言うとのけものにされると思ったからです・・・ シュンタたちはどうなるんですか？」と校長先生に尋ねた。

校長先生は「いま警察署で取り調べを受けているところです。その調査結果をもとに家庭裁判所の裁判官から犯罪を起こさないように厳しい教育プランが言い渡されます。罪の重さによってはお母さんやお父さんの元を離れ、特別な教育施設に行かなければなりません」と話した。

クラスメートの一人が「万引きってそんなに重い罪なんですか？」と聞いた。

「うん、いい質問だ。十年間刑務所に入る場合もあるし、罰金刑もある。五千円のゲームソフトを盗むと五十万円の罰金を払うケースもあるんだ」

「百倍！」誰かが叫んだ。クラスがざわめいた。

「その罰重過ぎ！」と言う声があがった。

校長先生は「そうだろうか、お店の人の気持ちになって考えてみれば、けして重くはありません。皆さんが持っているゲームソフトや天体望遠鏡やランドセルや教科書が無くなったら困りませんか。それも毎日皆さんの部屋から無くなっていくとしたら、悲しくありませんか。法律は自分の身になって考えましょう。と教えてくれているのです」と答えた。

校長のケチンボウ！

先生はオコリンボウ！

16

校長先生は黄色のチョークで「校長のケチンボウ！」と黒板に書いた。次に赤色のチョークでその横に「先生はオコリンボウよ」と書いた。「みんな、この落書きを誰も消さなかったとしたら、どうなるだろうか？」

1 そのままになる

2 落書きが増える

3 もっと大変な事が起きる

17

1. そのままになる。
2. 落書きが増える。
3. もっと大変な事が起きる。

さあ、みんなはどうなると思う？」という問いかけに子どもたちは戸惑った。

最初多くの子どもたちは1のそのままになるという意見だった。

しかし、以前、近くの空家であったボヤ騒ぎの話題になってから、3の意見が多くなった。



18

緑野の高台に洋館がある。

以前は小綺麗な家だったが、空家になってから落書き一つ、二つと増えていった。やがてゴミが家の前に捨てられるようになった。庭に外された雨戸がうち捨てられた。

中から声がすることもあった。



19

ある日、洋館から煙がたちのぼっているのを子供たちが発見した。

あわや大火事になるところを子どもたちの通報で消火が間に合った。ボヤのあとにはタバコの吸殻が残されていたらしい。

子供たちは消防署から感謝状をいただいた。



20

今はゴミや落書きが片付けられ悪いうわさも無くなった。
子供たちは犯罪防止の目的とやり方を除々に学びつつあった。
七日後、丸坊主になったタケハルたちが登校してきた。そこにはシュンタの姿は無かった。



21

長い梅雨続き、その日は肌寒かった。ミチオは毛布にくるまりシュンタから届いた手紙を開けた。

二枚のA4用紙に、何度も何度も消しゴムで消して書き直した跡があった。

手紙には児童自立支援施設にすること。そこは窃盗や傷害事件を起こした少年たちが立ち直るための更生施設だということが書かれていた。そこで、万引き被害に遭っているお店の店長さんの講話があり、万引きのために、利益が出なくて従業員さんにちゃんと給料を払えなかったり、最悪の場合は閉店した店があることを知ったと書かれていた。

万引きを犯したことへの反省と万引きをしてはいけない、という忠告だった。

ミチオには万引きで店が閉店してしまうということが実感できなかった。ただシュンタが早く戻って来てほしいと思った。返事を書くつもりで手紙を机の奥にしまった



22

桜の幹でセミたちが鳴いている。相変わらず教室には誰も座らない机が一つあった。しかし、万引き事件から一ヶ月もすると事件のことを話すことは無くなった。話題は来週からの夏休みの事に移っていた。

第三章 なぜ、あなたが…

23

第三章 なぜ、あなたが…



24

休み時間、アケミがミチオに話かけてきた。

「明日から夏休みだね。でも夏の自由研究って毎年悩むんだけど・・・ミチオ君は何か決めた？」

「決まっているよ」

「昆虫の研究でしょう」

「そう、今年は蝶の観察にしようと思っているんだ。お堂の回りにはいろんな種類がいるんだ」といいながらミチオはアケミの目を見た。アケミの瞳に自分の姿が映っていた。

ミチオは話を続けた。「ギフチョウに似ている蝶を見かけたんだけど、自分のもっている図鑑では詳しく分からないんだ。図書室の図鑑でも分からなかったし・・・だからもっと詳しく調べようと思ってね」

「そうなんだ。そんなに面白い、蝶の観察って」



25

「お堂下の池にカンアオイという草が生えている。葉の裏にはギフチョウの幼虫がいる。みんな気持ち悪がって近づかないけどその毛虫がギフチョウになるんだ。みんなギフチョウのこときれいな蝶だというのに毛虫は嫌いなんだなあ。幼虫がいなくなるとギフチョウもいなくなるのに」と言い終えて、アケミの瞳を見ると自分の顔が映っていた。ミチオはなんだか恥ずかしくなってその場を離れた。



26

その日、仕事中的お父さんは受話器を取った。

「警察から電話があって、ミチオが万引きをして補導されたの」お母さんの声だった。

「万引き・・・」

「そう、何かの間違いよね。わたし今から警察行くけど・・・」

「いや、ボクが行く」

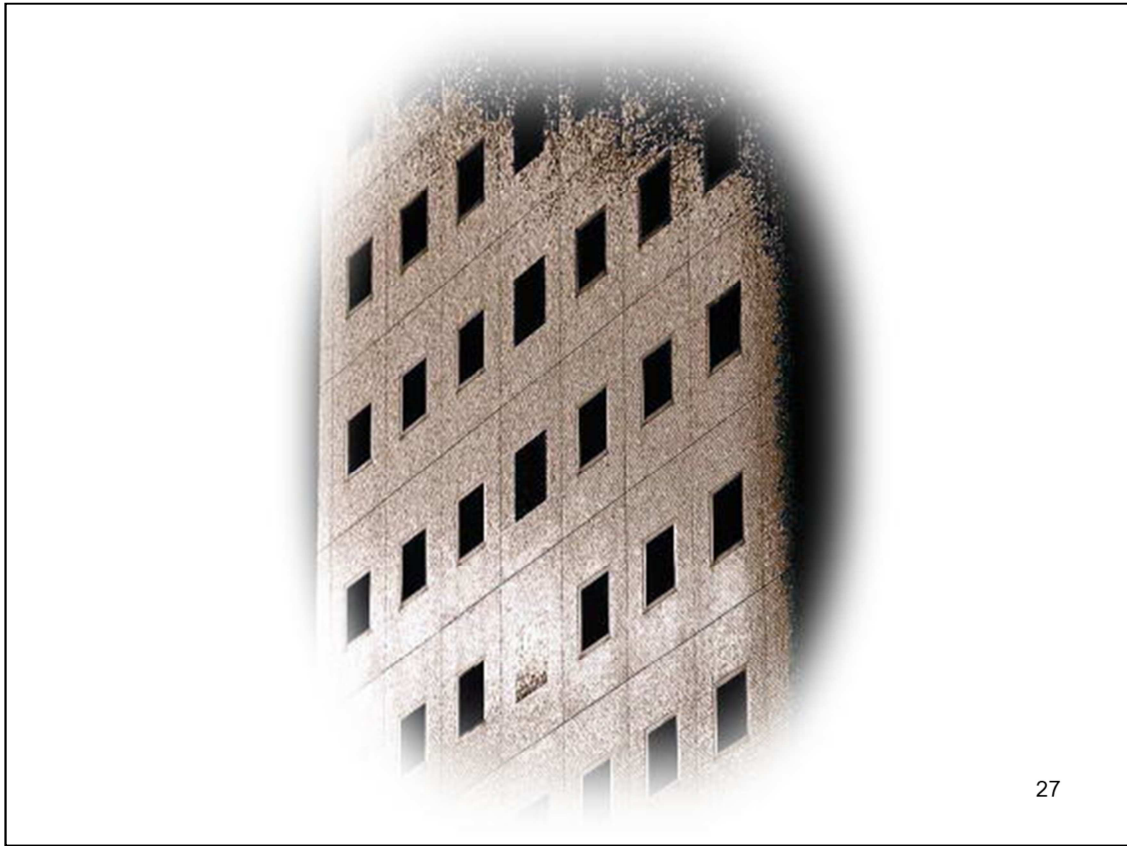
「仕事は大丈夫なの？」

「ああ」

「ちゃんと説明してよ。ミチオはそんなことをする子どもじゃないって」

「そうだな」

お父さんは夕方の仕事をキャンセルして警察署に向かった。



27

警察署では校長先生がミチオに付き添ってくれた。お父さんはうなだれているミチオを発見した。ミチオは顔をあげようとはしなかった。

校長先生の話では、ミチオは凶鑑を万引きしているところを、巡回中の警察官に補導されたとのこと。

ミチオはアケミのことを考えていた。万引きで捕まった直後、本屋の奥からアケミが出てきたからだ。はじめはアケミがなぜお店の中から姿をあらわしのか意味が分からなかった。いつも本屋さんと呼んでいる書店の主人に「お父さん」と話しかけている様子でその意味がわかった。

少し形の小さい蝶が載っている。ヒメギフチョウという名前だった。ミチオは探している蝶の名前をやっと知ることができた。勝手に手が動き、凶鑑を手さげカバンの中に入れた。店の外に出ようとした時、後ろから「君、精算してないよね」と声をかけられた。

顔が真っ赤になり心臓が破裂しそうになった。

シュンタの言葉を思い出した。

「万引きをしてはいけない」というシュンタの《願い》をかなえることができなかった。

情けなくなり目が熱くなった。そのときアケミが現れたのだ。アケミはミチオを睨んでいた。ほどなくパトカーが来た。警察官にうながされて後ろの座席に乗った。

ふり返るとアケミが不安そうな顔でパトカーを見つめていた。アケミにもすまないことをしたと反省した。



28

警察署からの帰り道、お父さんとミチオは黙ったままだった。夏の夕暮れは長かった。お父さんは町工場の横にある古びた駄菓子屋に入り、アイス棒を二本買った。二人は公園のベンチでアイスをなめた。お父さんはミチオに語りかけた。

「ほしかったのか、その図鑑」

ミチオはうなずいた。

「もうすぐ誕生日だろう。プレゼントはその図鑑でいいか」

ミチオはまたうなずいた。

長い沈黙のあと、お父さんは「誰だって失敗もするし多少の悪いことも経験する。大切なことはその後どうするかでその人間の価値が決まる。誰だって自分の弱いところと向き合うのはつらい」と言い、ミチオの目を見た。

ミチオはしばらく考えた。

そしてベンチからたち上がり「本屋さんに謝りに行くよ」と言った。

お父さんは大きくうなずいた。



29

書店は夜八時を過ぎても営業をしていた。ミチオはまた心臓の早くなるのを感じた。まずはお父さんが「この度は申し訳ありません」と長い間頭を下げた。ミチオもそれに続いた。

本屋さんはゆっくりと「本が泣いている。この世に感動を伝えるために生まれてきたのに・・・万引きされるなんて、読みたくて、読みたくて買いに来たのに、その本が無いなんて、お小遣いを貯めて買いに来た人もいるだろうに・・・」と静かに語りかける。

そして、「私の使命はこの書店が街の文化・情報の発信基地として、より多くの人々から末永く愛されることなんです」

ミチオはさっき警察で怒られるより心が震えた。

本屋さんはうな垂れるミチオの肩に、そっと手を置いた。

ミチオは「ごめんなさい」と本気で謝った。

本屋さんはお父さんに「最近は謝りに来ない親も多いんですよ。店に来てもお金さえ払えばいいという態度なんですから」と話かけ、お父さんは少し驚きながら「そうですか」と返した。

本屋さんはミチオに「君はいいお父さんをもったなあ」と言ってくれた。ミチオにわずかな笑みが戻った。

お父さんは蝶の図鑑を買い求め、二人は店を後にした。

第四章

心を洗う^{あら}

30

第四章 心を洗う



31

夏休みに入った。

プールの帰り、本のことで相談に乗ってもらうために書店に寄った。店の前で本屋さんが返品作業をしていた。ミチオはその作業を手伝うことを申し出ると本屋さんは「サンキュー」と言ってくれた。ミチオは本を運びながら、その重さに驚いた。本屋は楽な仕事だと思っていたが、とんでもなくハードな仕事だった。そのうちアケミも返品作業を手伝いはじめた。ミチオが作業をしているかたわらで返品先の担当者が「こんなに返本するんですか。困るよな」と本屋さんにグチをこぼした。

作業が終わったあと、ミチオは天然記念物ヒメギフチョウの観察という本を取り寄せてもらおうと本屋さんに頼んだ。あの図鑑の最後のページに紹介されていた本だ。もっとヒメギフチョウのことを知りたいと思ったからだ。



32

本屋さんは取次店に電話をしてくれた。しかし、在庫が無いということだった。次に出版社に連絡した。しかし、その本は絶版になっていた。

それでも本屋さんは「著者に連絡を取ってもらえませんか？どうしてもその本が必要なんです」と頼んできた。しかし、残念ながらその本を取り寄せることは難しかった。

ミチオは気落ちしたが本屋さんの姿を見て、「ありがとうございます」とお礼を言った。

アケミはミチオの手を取り、本屋さんに「お堂のところで遊んで来る」と言って店の外に出た。



33

お堂へ続く畑はニガウリ、キュウリ、トマトの花が咲き、実が成っている。

「本のこと残念だったね」

「うん」そして、顔を上げ「心配してくれてありがとう」

「きっと、その本も喜んでいると思うよ」とミチオを励ました。

ミチオは手さげカバンから、ぼろぼろのポケット版昆虫図鑑を出した。その中にはさんであるカラーコピーを見せようとした。

アケミが心配そうな顔をした。

「これは万引きしていないからね。信用してもらえないかもしれないけど」

「信用しているわ」

「お母さんが言ってたんだ。一度約束を破ったりウソをつくとも最低三年間は信用してもらえないんだって。ボクもそう思うよ」

アケミは足を止め「私はミチオ君のことを信用したいの」

ミチオも足を止めて「ごめんなさい」と言い、頭を下げた。



二人はまた歩き出した。ミチオはそのコピーを見せながら話を続けた。

「春にこの蝶を見かけたんだ。最初は小ぶりのギフチョウかなあと思っていたんだ。でも図鑑で調べるとヒメギフチョウだと解かった。ヒメギフチョウはね、羽を閉じると内側の部分が赤くてかわいいんだ」

「それでヒメって名前なの？」

「そうだと思う。それに身体も小さいからね。ギフチョウは本州の日本海側、ヒメギフチョウは長野県の山岳地帯や東北や北海道の一部に生息している。このふたつが一緒の場所で生息する例はほとんど無いらしい」と話した。

ウスバサイシン



カンアオイ



35

二人はお堂下の池に着いた。

ミチオ「ここにはカンアオイという野草があつて、ギフチョウの幼虫が育つ。あそこ、ほら、風が抜けて行くあの場所にウスバサイシンがあるんだ。だから、ヒメギフチョウの幼虫が育つことができるんだ。この場所は二つの蝶がいっしょに暮らせる秘密の場所なんだ。このことは校長先生もまだ知らないと思うよ」

「学校が始まるのが楽しみね」とアケミがほほえみ、サンダルのまま水辺に入っていく。そして、両手でビシャクを作りミチオに水をかけ始めた。

「そーれ」

「冷たいよ」

「そーれ」

「よーし」とミチオは大きな声をあげながら、アケミに応戦した。

「キャー」という声が響いた。

二人は容赦なく水をかけ合い全身ビショ濡れになった。

それでも二人はやめなかった。



36

見上げると雲があかね色に染まっていた。

ミチオは「帰ろう」と口にした。

アケミは動かなかった。ぬれた前髪の中にアケミの泣き顔があった。

クヌギの葉裏を揺らしたのは、かすかな秋風だった。



37

夏休みが終わった。

学校に行くとアケミは転校していた。

急な転校だったのだろうか、まだアケミの机が残っていた。

先生も転校の理由を知らされていなかったらしい。一言「ご家庭の都合で」と説明があった。

夕方にはアケミの机は片付けられ、シュンタの帰りを待つ机だけが残った。

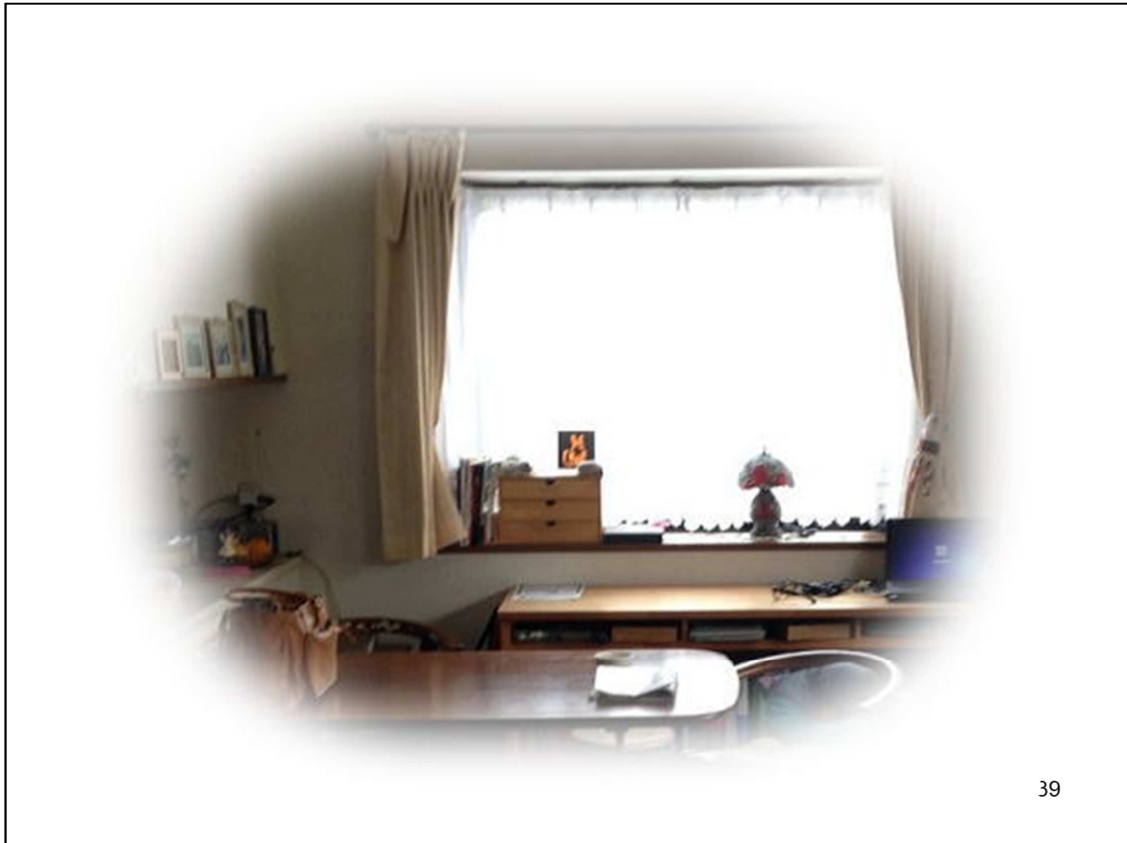


38

帰り道、書店に寄るとシャッターが下ろされていた。紙がガムテープで貼ってあった。紙には難しい字がいっぱいあった。うまく読めなかった。

「宮内書店に関する・・・倒産、・・・債権者・・・、破産管財人・・・、問い合わせ先は佐竹弁護士事務所・・・」

しかし、アケミと本屋さんがいなくなったことはだけはミチオにもわかった。



39

次の日の朝食

ミチオは「あの書店が閉店したんだ」と家族に伝えた。

お父さんは「そうか、あの書店が無くなると遠くの街の書店に行かなければならないなあ」とまた新聞に目をやった。

お母さんは「インターネットで購入すればいいじゃないの。べつに困らないでしょう」と

ミチオは「そうじゃないだよ」と言い終えると

ハシを置き、部屋から出て行った。

むしょうにお堂下の池に行きたくなったからだ。



40

家を出たところで郵便屋さんから小包をもらう。
自分宛ての荷物だった。
中には天然記念物ヒメギフチョウの観察という名前の本が入っていた。
ページをめくってみた。
確かに探していた本だった。
贈ってくれたのは本屋さん、それともアケミ？
文字が涙でよく見えない。

本屋さんの言葉を思い出した。
本が泣いている。
この世に感動を伝えるために生まれてきたのに・・・
万引きされるなんて・・・

輝く未来

あなたのその手 悪い世界には 伸ばさないいで 輝く未来に。
どうして自分で汚してしまうの あなたには輝く未来があるよ
物を盗むなんて 許されないよ 夢見て歩こう 未来に向かって。

あなたのその手 悪い世界には 伸ばさないいで 輝く未来に。
万引きなんて許されない。あの青い空 きれいでしょ。
未来があるよ 信じて歩こう
あなたのその手 守りましょう。

この曲は福井工業大学附属福井高校の生徒さんが作詞作曲され、平成22年9月22日に福井警察署
と西武福井店前で歌われました。こちらのサイトで視聴できます。
<http://www.manboukikou.jp/html/song.htm>

輝く未来

あなたのその手 悪い世界には 伸ばさないいで 輝く未来に。
どうして自分で汚してしまうの あなたには輝く未来があるよ
物を盗むなんて 許されないよ 夢見て歩こう 未来に向かって。
あなたのその手 悪い世界には 伸ばさないいで 輝く未来に。
万引きなんて許されない。あの青い空 きれいでしょ。
未来があるよ 信じて歩こう
あなたのその手 守りましょう。

この曲は福井工業大学附属福井高校の生徒さんが作詞作曲
され、平成22年9月22日に福井警察署と西武福井店前で歌
われました。こちらのサイトで視聴できます。
<http://www.manboukikou.jp/html/song.htm>

おわり



平成24年度 NPO法人全国万引犯罪防止機構 作品

42

※こちらの教材は無償提供しておりますが、授業やセーフティ教室で使用される場合は、当機構にご連絡ください。
※この物語はフィクションです。実在の人物や団体や画像などとは関係ありません。

おわり

最後まで聞いてくれてありがとう。

※こちらの教材は無償提供しておりますが、授業やセーフティ教室で使用される場合は、当機構にご連絡ください。

※この物語はフィクションです。実在の人物や団体や画像などとは関係ありません。